



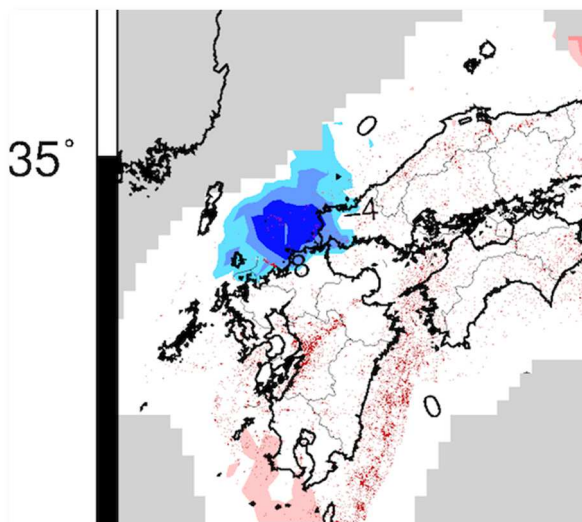
九州北方海域の地震活動静穏化異常について

6月11日付および先週の7月16日付のニュースレターで、九州北部海域（中国地方西方海域）を中心とした地震活動静穏化の異常について報告させて頂きました。

右下の図は先週は掲載しておりませんが、Lタイプの7月12日時点の地下天気図です。

Lタイプでもこのように青色の静穏化の異常が広がっています。またこの地下天気図解析に使用している地震データは2011年の東日本大震災以降の約7年間のデータです。これは日本全体を統一的に解析するためには、東日本大震災以前と以後で、特に関東地方以北の地震発生パターンが大きく変わってしまったためです。

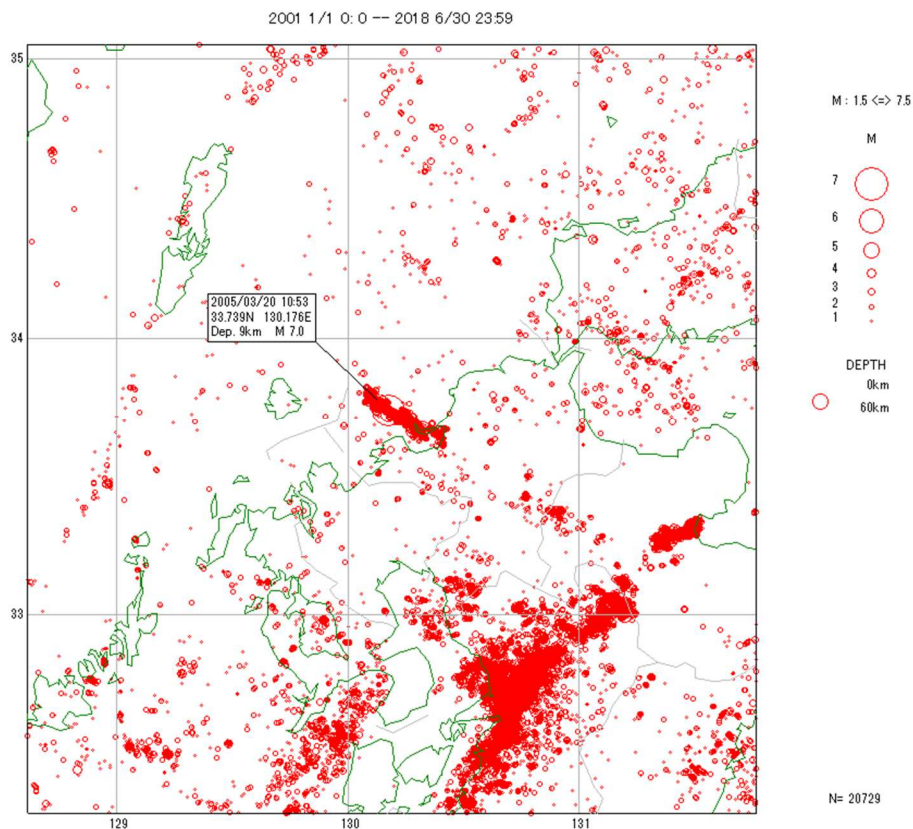
そのため、2001年以降のおよそ18年間という長期間の地震データが使えるのは、中部地方以西の地域という事になります。



下の図は2001年以降のマグニチュード1.5以上のすべての地震活動を図示したものです。この図の中だけで2万個以上の地震が観測されています。ただ先週号でも報告しました九州北部の異常となっている地域では、ほとんど地震が発生していない事もわかりました。従いまして、この九州地方北部海域の異常は、解析の対象となる地震そのものが少なく、静穏化の異常としての精度は低いと考えたほうが良いとの結論に達しました。

ただ、九州北部には先日世界遺産にもなりました宗像市を通る宗像断層を始めとする多くの活断層が存在しており、別の地震学的な異常（b値解析という地下の応力の状態を反映する解析）では、日本列島の中で最も応力レベルが高い状態とも考えられる結果となっている事も事実です。

実際、2005年3月には福岡県西方沖地震（マグニチュード7.0）が発生し、震源に近かった玄界島では住宅の半数が全壊する被害を出しました。この地震は有史以来、初めての大きな地震活動であった事を肝に命じておく必要があると思います。政府・地震調査委員会にとっても全く想定外の地震でした。





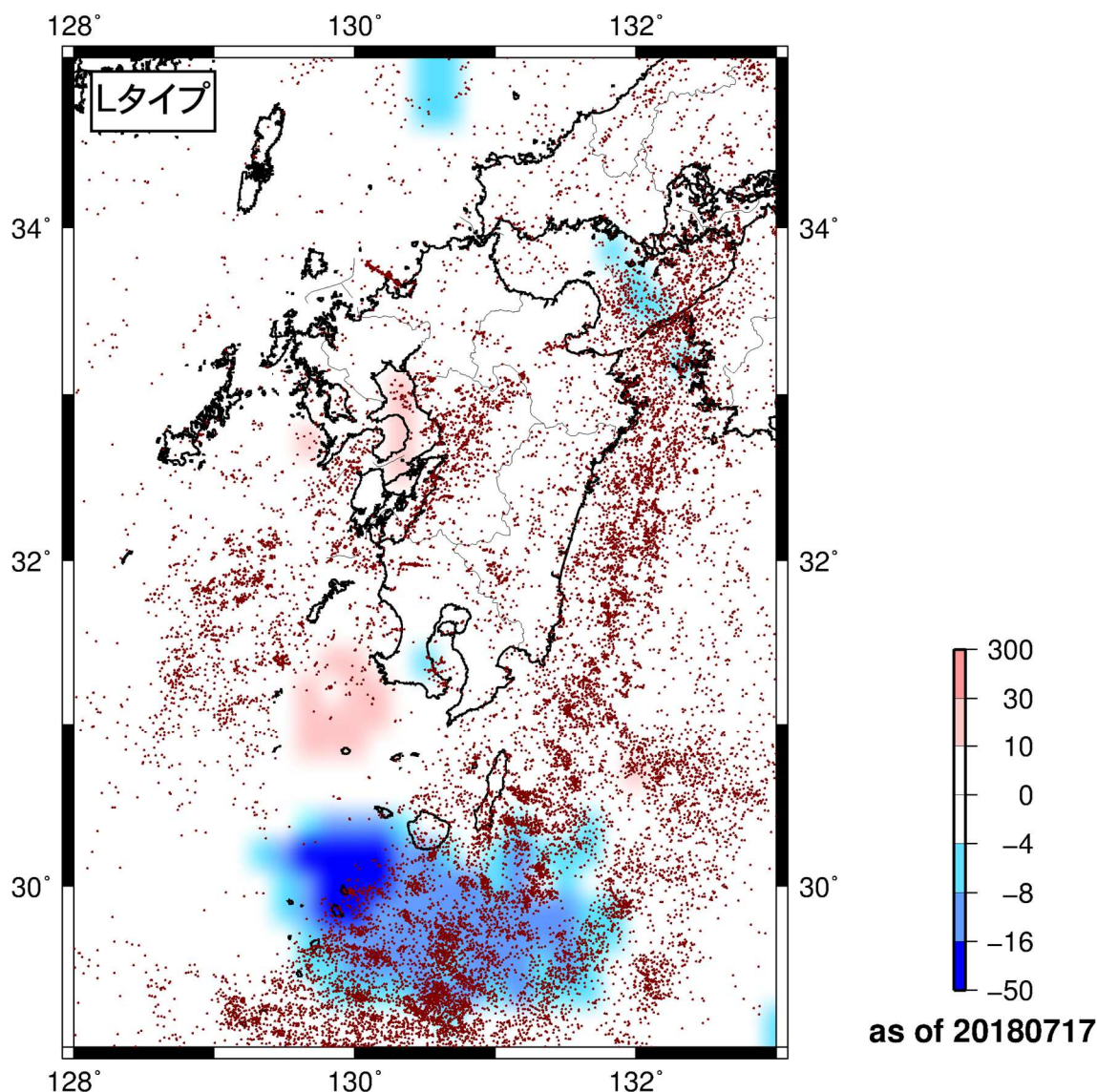
九州全域の地下天気図®

このような経緯もあり、2001年以降の18年間の長期間のデータを用いた、新たな解析を九州地方で開始する事としました。

下の地下天気図は、7月17日時点の長期間の地震データを用いた地下天気図解析です。海域まで解析の対象とするため、ここではマグニチュード2以上の地震を用いて解析を行っています。

地下天気図のパラメータをいくつか変更して、計算してみました。いずれのパラメータでも九州南方海域での地震活動静穏化が共通して検出されました。

また、この地下天気図では、九州北方海域での顕著な静穏化は検出されていません。この事からも先週号でお知らせした九州北方海域での異常の精度は高くないと判断いたしました。さらに現在の九州陸域は、2016年の熊本地震の影響がまだ残っており、精度が高い解析がしづらい状況である事も判明しました。



お知らせ

7月30日は第5月曜日のため、DuMA ニュースレターは休刊となります。